

百人一首改觀抄

上

576

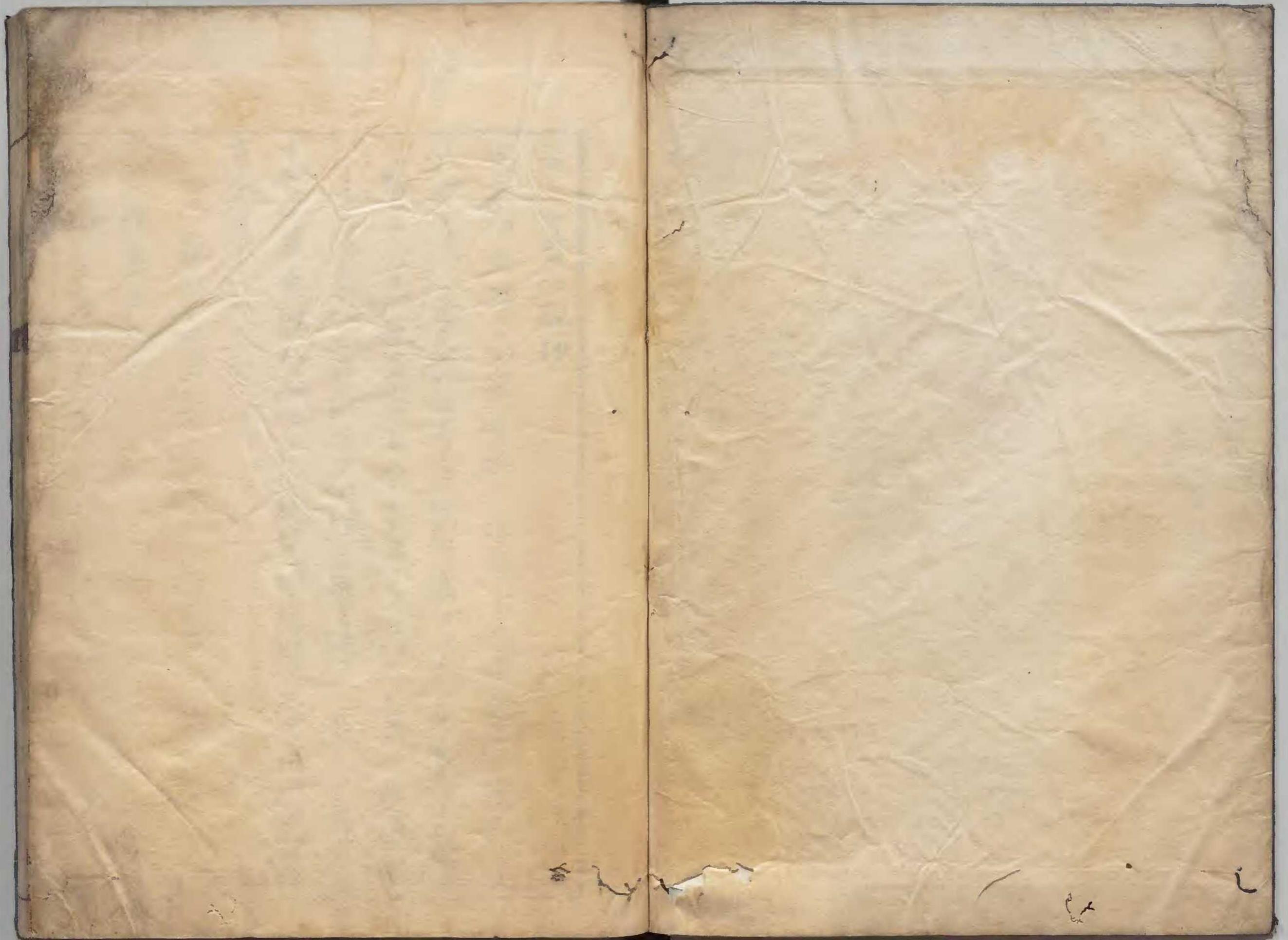
庫	文	閣	內
二	二	二	和
〇	五	六	書
兩	六	八	
一	八	〇	
四	二	〇	
架	冊	號	類

和歌

內閣文庫	
番號	和 25632
冊數	2 (1)
函號	201 576

201-576





百人一首改観抄

定家口老後一小倉山荘一隠居一

浅草文庫
当世歌花

ふれとて実とわらうにせまきうをなまきうお
てびり今れ奇の中よるるうを一首つみ紙形ふ
かきく漳子におされりうを後の世に傳く百人一首と
小倉山荘色紙和奇といふなりけい山荘のふと波口の秋續
古今集一

又風雅集一
志のくまじゆといふ小倉山荘のねまはるひに



玄旨法不云せといひりくおりのそれ又させる作者
と名一お入りささる人の足お西よおされりるを後よあま
るおつわのりそ作者れ名をはめて前後と治書一書
ひろりりるとしひはさしりゆきと共末此人といひく
わういて久しくいしりさりるやと書一はすりり後後
撰集よ定家ハ

かよしかり方とほくしとまをねんかう記すの二載より
新後拾遺集よ建保二年丙裏秋十其首奇合よ秋麻を
雅經ハ

さひハ

初の奇ハ元良親王と伴登りかう成中奇とてまされしと
と中の會嘉門院別當り奇ハ初ハ似ゆるりり以後の奇ハ
後成りり奇とてまされしり定家ハ人の奇を記す人ハ
わくまとのつりかまろ元雅經ハ其辨るあかりハ
抄抄おもむせりり二首とて千載集よあされと彼ハ廣
りハあ首の作者おほく隠れさるるまろハハ百首との
比りそわをいましハ今川而の二首撰ひおりりハ
家隆ハの奇ハ元長元年よ海まろをまろまろとれハ
新物撰集より後ろふハ百首とて撰れりりハ又油
奇大概ろふろれれおろハ入られろろハ作者

おのくろ秀司の中は秀方とて撰れしふふらり
うとなく山莊のほきくありゆふふらうじとひと
やうらつあまふつ移りて十は十一のまらうとく

天智天皇

天智天皇 第三十九世諱天智天皇為皇子時御名葛城皇子亦中大兄皇子舒明天皇弟一皇子母皇后宝皇女即皇極天皇也
皇也在位十年 古抄云号田原天皇是誤也 光仁天皇謚御父志貴親王号田原天皇志貴親王天智天皇第五皇子也
秋代田のりがた深のときとわらうる衣もいかにぬき

後撰集秋中ふ部志と載と六帖書二まのり
かよおせりたり日本書紀第二十六卷秋七月甲午
淵我梅能始寝之柁舸羅你婆底々威底舸矩野始
悲武謀柁淵我梅弘報梨二の清製の初乃古雅なり
より考まハ秋の田れりけの海りといふやうり
う色の沖製わらうとふいまは案すふ後撰集ハ
いまも再作せさるるお書のりりなれとてやうの誤

より箱の中よりなくみとめりし一巻衣ととりかへし
せりあまの白妙よふせりふ分て子まきとく長しや
あわししと時流と感してわうとせりるり首長詩
よ同第衣帯通年巻と作まり顕昭袖中抄一風伝
字とあてて云

かひつひのよ白きハ香うソかおこのしひろけ衣さびしてはり
これ山衣とほと流するり又美葉集身ナア
流波極よ寄とゆふあいらふもかきりたあふのほはらも
下白ハかれしきううぬの世せりるりあひのいはいと
しきんありは衣帯とせりくかせりるり君のやうあると真しく

よりり又初書との可いふまゝと真しくはせりし
よりれをいほまあめきふと布かと流されとあわてか
しと流すし古抄よ流の時くこのうきふふあめと
白妙の衣ほもとにいりかともなれ極よふありとゆふ人
わりまなあれ衣よほまてふ山よその衣とわきあめや
にされと白妙の衣といり流れ衣とていつか初なりといふ
流ハらぬし一やれ初書のおろとつふハ衣れカをおく
ふとくかれといふるりされハ流れしれあしんとい名とわく
といひよしといふるりあくとのうらあめとつふ白妙の衣か
こはよませまのしとまはうすまて衣よ入くあひわらひ

いと秋を〜そのと秋といふ〜さるにとも〜
ことと瞳推り但つ〜は神製とてま〜
後系格抄改

春風志の〜名とをり〜けく幾日〜ん天り〜

雅臣

白妙の香吹〜と〜〜〜ヤと霧命〜わ戸の〜

宗尊親王

作保指の衣〜〜〜春日の名〜〜む〜

定家

大井川〜り〜ぬ井を〜おの〜〜〜

又衣さ〜せり〜敵境の〜ち〜を〜と〜
〜り〜り〜と〜ら〜〜〜その衣〜
〜り〜初なりと登以切知られ〜
多知豆氏登ハ五音通〜り中〜
移して〜ふ〜れ〜を〜せ〜
久〜〜〜と〜と〜と〜と〜と〜
せりやう〜と敵意〜は〜も〜
此神時〜り〜板弁の神〜
〜ん〜との〜よめ〜は〜
古字の初を改〜く〜

世の如く人の相繼のやまうりかよ

わりのやまひいせとくゆいしつふふぬいりやかりなり
いふふちよ女れやまひいり一のけりなり一若き一す
とせわりのやまひとつもくうかふふゆふふと
いひくるといつり縁ふゆり流ふたか一公望日本紀私
伝ふ山形の時川足流ありといひり百葉上足痛く足疾
さうひりいふ日本紀の顯宗紀ハ脚日本とかきり定
家ハの密勅よ只らもやゆりゆり一川の中とつくともの
知くいはさうり足と川といひゆりゆりもとのわいこふあめ
流ハハ流川と利とわきハ流川の流とさうひてさうは

とのいふい流なまよいはりいゆきとさうたれ流とわれ
ハ流川を用一垂柳とさうりやうさとうさうきあり流
わま一とさういハ流り流の志とさうハ心なりだ
山名あり流といひり百葉ハ礼流と記てさう
巴尾とさうり若れいさうり流なりを片假名りことこ
とゆきハ流きり流山名の習として雌雄ひりハ一雨
に居きとさうりハとものくゆりいハ若と流とさうり
おたりをれいさうり秋れ葉のまきハ若とさうり
いりく独寝の若一流ハ山名とわらぬ若れ若其名
のまきとさうりい流人と流りりいさうりハ流のやう

山邊赤人

山邊赤人の姓なり。百葉書八家持言云足
日本能山多許曾婆峯向尔孺同着云打蟬乃人有我哉
如行爲跡可一日一斬毛離居而嘆息良哉云云六帖亦云
秋風の吹より毎に山邊のひとりしむきハ物そり時
しりハ能くまらハあつて山邊能くうり時うねハさうれり
法ハ細てふ山邊のゆきしりしきとてあつてとて
いとくろしこくあつてまらハ心の底とてあつてとて
たあしりまらしこの秋ととりくは多約流橋さくまら
とりてあつて居るあつてしりしりあつてあつてあつて
山邊赤人

赤人ハ父祖未詳時代ハ百葉書六ノ神皇正統記云
天保八年マケの言及ハれし聖武の朝ハ人ナリ山邊
氏ハ日本紀乃顯宗天皇記云伊与赤目赤小楯と云ハ人
初ク山邊連と賜ヒルハ山乃法と云と賜リルハ初ナリ
天武天皇十二年十二月ハ伴連等ノ六十氏ハ赤稱姓を
賜ヒルハ時山邊も之内ナクと云ハり山邊初稱ナリ日本
紀ハ延暦四年五月詔曰先帝御名及朕之諱自今以該宣
並改避於是改姓白髮部為真髮部山邊為山乃云云
天皇初白壁王とし桓武天皇成山邊王とし
詔ふれハ屋まハ赤人とし之と云ハるハ初ナリ

いさす古今も字のまじりけりんおぼつかなし 若草の
津よぬれぬさ記といまきりりあや今ハ淳和天皇の清
講ふらうりく大伴を伴とあり七伴記にやまは
やまのりといふ人わりといふ記なり 桓武の清講と
よや又山部といふといふは氏とて百葉とて赤人の氏とい
ふ山部といふのこけりりるを古今真名序に初て山邊赤
人とけりまじりりあやあやまじりいふとて赤人といふと
いふは桓武天皇の清講ふらうりて日本後紀に一巡
曆十二年記に山部真名春日といふ人わり
田子浦よあて足とら白妙はゆりのち根よ音はゆりけ

新古今を記し歌志とありとは百葉集守之難奇
の中ハ山部宿禰赤人望み尽ハ作歌一首并短歌は短
歌すなり今ハ奇しく腰白真白衣けその白名はあ
らうとわくをやく小裁りあうくハ云任ハ詞曲集にかく
ていさうありはのちり百葉集とて

ひらきとつぬたの浦大忌の女とけりこころありと
あやまきくは浦のおりり記けりてあやふふのこ
とけりまじりる音白妙はゆりく天よりくともくや
に及んき人の意風作者のふらうりてあやふふのこ
ゆりてあやふふの意風作者といふゆりてあやふふのこ

國書系記より富士山とから富士山と山名富士山郡
名と都良香り記よかあり

猿丸大丈

長明名抄云或人云田上の志とにせづとつふこころ
わりとこ猿丸大丈う巻わり底の界とそこの巻よ
かこのせしれい皆人志まり

古今集序云大友黒主之詔を猿丸大丈改也頗る逸真
而體甚鄙これふまは猿丸大丈う詔ハ逸真わりと弁ら
評いやかつさるしよやされとび序の卯ふゆ々さ物し
又えさるるふかし又猿丸大丈名よとせわれ何氏の人多と
す一と大丈とつふハ相違は友わりゆりよやほふとくく之は
われと伝しかり又集とつふゆ一其のきと云何はれとす

ふ人の奇伝を羅しれは何人のるせりやうわん用りい
ぬゆたり

おく山よお葉ゆかなく麻は急きくけり秋ハあし
古今秋とよし人志しいとわけて是貞のまこはあつす
はう志峯山里ハ秋とてこふ伝一これ麻のなくあふ目
とさ傳つては詔とるしひつれり管あ葉葉とよし
前と載らる波序の意時りす合のこをえらうとてふり
又ふれ秋古評よわし猿丸大丈集よとてふれはあ書り
申し奥山とハ麻のよむ百葉集すすも

奥山よほてふ麻のよむし妻とゆ秋のちゆく

りら端かといはれよ二つのらまゝ一帯八麻のゆみか
ろとらゆきり菱家のひさふ付その沖詩よ 秋山寂く
葉零く麋鹿鳴音數處聆勝地尋来遊宴處各朋各酒
意猶冷此身之句よ勝地尋来とつまゝ一人のそを分
るまゝいほささくもかゝるよ一一はりらゆきまといは
秋更とてのあまゝいわゝい本葉ハ奥山より先色付て
こふはほふま付ゆりてくらの秋のくらり一葉つくをそじ
るふはりりるりさうても古今集よ

りら並に教てはりり我意よたまをねまてらゆらん
とらりりひさと漸くよまはりりあまのらゝいおとらり

秋の昔よりいらねま比ハねまのらぬをり古今あ麻
れしよ首わの中よ今のすハあ二ふわり秋ハ秋中ハ比
さうりるり物られハ秋あもくのちるぬらうれいまは
きくね一一あさくけを秋ハゆ一一まといハ秋ちす屋て
あし秋中ふりりて悲しきけとらあ人のちハ大やりに
いこよまハこ海やうるりちられハ冷くわうん

中納言家持

續日本紀云延暦四年八月癸亥朔庚寅中納言從二位
大伴宿禰家持死祖父大納言贈從二位安磨父大納言
從二位旅人家持天平十七年授從五位下浦宮内少輔

歴任内外實龜初至從四位下左中辨兼式部負外郎大補
十一年拜參議歷左右大辨尋授從三位坐冰上川繼反
事免移京外有諸宿罪復參議東宮大夫以本官出為陸
奥按察使居各畿拜中納言春宮大夫如故死後二十餘
日其屍未葬大伴繼人竹良等殺種繼事發覺下獄案驗
之事連家持等由是追除名其息永王等並家流馬古
抄よきと川のりまりて繼人竹良等家持を射殺すと
いり又在陸奥國薨といへるも誤り又大伴氏はそのよみ
天孫天沼り多ひ一時沙汰なき一日信余神武天皇の
時道信命と名と多ひく功勳せしおのり一神の裔なり

日本紀の記明らるる日月のふと大伴姓なりといふ
ころく一かたは記明らるる又大伴と大友といふは
大友乃清諱大伴なりといふ弘仁十四年物わりく大
伴氏大の字を降く伴と名けり後して大友の字をふと
大の字を捨るなり

かき記のよきせり橋よ重相れ白きとていふ書をゆけよ
新古今記ありいぬ事ありいぬ事ありといふ新の橋
ハ淮南子よ七月七日夜烏鵲填河成橋以度織女といふ
よりおこりありあり七月七日の事いふよ河よはれよ
はるひいかりの事いふよ月ひありありの事いふよ

中比より小古寺を築けりやに依りて家隆に

かき記のまじりていばるるを并ふるに孝はけり

後成に九十賀のふし御製

かき記のまじりていばるるのまじりて橋よおのさしあり
これといふを御用おまじりて或は孝の橋を築けりとい
いひたせりやれんわれといふ家隆の寺を築けりといふ
ゆりさ記のまじりていばるるに孝はけり

安倍仲磨

古傳云中智大輔船守子かき記といふ船守續日本紀より
及ぬ人々安倍氏ハ孝元天皇第一皇子大彥命裔也

天武系ゆりさ記に依りて春日のまじりて一月と

古今羈旅詞云ふりりて月を又そよとけりといふ

ゆりていばるるに依りて仲をりりておあつりといふ

ゆりありきりふおまこの年をてえりまうとこころ

けりていばるるに依りてひまうりりてあにいひまを

さるんとくおあつりきりめいりといふ所の海をよかのおれ

人よりまのまじりていばるるに依りて月をいとおりりり

ゆりおあつりきりをてよめりといふけりていばるるに依り

四十四世元正天皇の天武二年丙辰八月丹比縣守を遣

唐使にけりといふりて仲九十六女をわらひ人とぬ

あさうひの唐書列傳二百二十朝臣仲滿易姓曰朝衡云々
西云ふとゆりてゆりてゆりて二十八唐の玄宗皇帝
よけ久く秘書監とあり換授よりつり左補國とあり
其後四十六世孝謙天皇天平勝寶四年乙未清河遣唐
使とてゆりて玄宗といふ海とく朝衡とゆんといひはま
ゆりてゆりてゆりてゆりてとハ清河をさといひは朝衡の詩
人といふこの詩を贈り穿右丞王維秘書包佐清河の詩と
わり饒別序ハ五維ハあり唐詩列解ハ送秘書晁監詩
の注ハおせりハ饒宴ハ朝とありとて明列の注ハ出
中玉ゆんといふのうまハ浪を記すも東海よりあら

月のさゆ若かりの系ハ居くハ是乃ハ詩ハあり
やうふたりありありとてとありといふ義あり貴之
乃ハはと感情詩となく同じとあり古物日記ハハふりハ
わさうなりといふありありありありといひはハありと
やにいりといふありありありありといふありといふ
日記ハ書里ハにいりありありありありありありといふ
相ありといひやの初二百百葉集中ハわまハありあり
ハ振放と振誰とと振作といふけりありありありあり
ハありありありありありありありありありありあり
みるありありありありありありありありありありあり

古抄上大名の王舎城に付て觀ふ乃秋小玉即心王舎即
五蘊といつりといく我唐ハ王舎城の心なり我といふま
ふとのわりいあふふふふふふふふふふふふふふふふ
中興武勳

里は名と我身あはれいふ城のうらねさりといふ位り記
字は心とありたりとてとろこさるゝ類せりまゝいふや

小野小町

父祖未詳古今に小野貞樹といふはせりかたはたれ一氏
ふれい親族あり一法撰上遍昭と石上奇とてまゝいふせり
あわり傳ふといふも多し遍昭とわり初年のやうおふ此

拾芥抄云と明
郡司女仁明時
承和之比人也
云古今目錄
并作者初類親
席古今抄等記

同之

ほ久しういふやとつあまは文徳天皇のまゝ盛なり
あはれより康秀の河橋とありてあはれいふはえか
しやといふまゝいふふふふふふふふふふふふふふふ
古今法撰上小町は河原のあま又法撰上小町は縁のあま
若小町はあまの小町はうまことあはれいふは小町は名はま
あま

花の色いづばりふふりかいつつは我身あまの法せし
古今春下類あはれいとまゝいふふふりかいつつは
うつりふふりかいつつと推量すといふとあはれいふは
いふり詞あり花の色いづばりいづれ花は別くなくさむ

「三つを世にあらわすは、いさゝか別を、ていさく、にぬ
おふ、福せし、まふゆ、と、まらじ、(三)花の色、い、やう
ア、りり、と、な、も、く、ん、こ、又、な、ら、い、春、の、を、ゆ、う、け、て、せ、ま、り
と、ふ、河、も、あ、言、と、急、事、あ、り、又、む、れ、う、ら、う、ら、を、と、ま、り、後
撰、集、よ、く、あ、り、け、く、ゆ、り、り、比、毎、の、屋、子、を、落、れ、れ、後、人
あ、り、い、

春、ら、ら、そ、我、身、の、り、ゆ、か、ら、い、い、人、ら、れ、む、ら、り、り、り
い、お、ま、の、ゆ、と、く、な、ら、ら、く、一、は、ま、の、な、ら、り、と、い、ま、り、り
け、り、ら、と、い、り、り、あ、言、と、あ、り、後、撰、集、静、仁、親、王

花、い、ま、な、ら、ら、せ、し、海、よ、ま、ま、と、く、我、身、よ、ま、ゆ、り、慰、も、な、り、

左、撰、小、町、い、く、に、奇、仙、よ、と、く、く、人、ら、れ、と、ば、く、ね、ら、り、り、
の、ら、り、歎

蟬丸 姓氏不詳

一、条、禪、園、の、東、斎、法、華、云、敦、実、親、王、の、雅、色、く、ら、と、名、抄
云、逢、坂、上、圓、明、神、と、り、い、昔、の、蟬、丸、の、り、の、ま、り、や、れ、ゆ、ら、り、
る、ら、い、と、く、う、ふ、神、と、ぬ、て、住、ま、ふ、る、と、一、今、と、う、ら、り、り、
た、り、に、い、ま、は、昔、法、華、の、帝、は、沙、伎、と、和、琴、な、り、い、い、
良、峯、の、宗、貞、と、て、か、り、ひ、ん、か、の、り、ま、て、借、ふ、ら、り、の、く、
い、う、く、と、と、ゆ、ま、と、ま、に、梅、す、り、ふ、東、海、法、華、と、蟬、丸、盲、目
と、と、琵琶、を、い、ら、り、り、逢、坂、の、や、ら、り、ふ、店、と、じ、ま、ひ、く、病

より博雅之位に於て流泉歌本此曲を傳はり敦實のみ
管絃のたゞをまゝしより蟬丸琵琶ハ是を習はりて流
しりて之をいふとして盲目此琵琶ハ其の始なりとされし
之を流泉の曲に蟬丸と世人盲目と云ハ流泉の流探初
歩小相坂の園とていふその人といふことと云又博雅乃琵琶
と習ふは字法拾遺に博雅之位と云けり人の本懐と云
に同じしと云は法外の世にありけりふ琵琶なるは
はるるは流を蟬丸と混せりや博雅ハ天唐の朝の人
たゞはか遠くや流泉集にありしとて琴とていふことあり
ゆゑ書きて月とよりぬらりの人も入りし者ありありふ琴

と云てしりていふ

ふれふ入とよりわづ月されい志してすすふと云ひあり
わふ坂の園流泉の曲に蟬丸と云ふは流泉の曲をいふ
は流泉の字ハ流泉集を考へればはるるは久しきを蟬丸の故
ゆふを考へて流泉の字ハ流泉集と云ふは流泉の曲をいふ
貞和の流泉の字ハ流泉集と云ふは流泉の曲をいふ
貞和の流泉の字ハ流泉集と云ふは流泉の曲をいふ

これやの流泉の字と云ふは流泉集と云ふは流泉の曲をいふ
流探初一ハ流探の字ハ流探集と云ふは流探の曲をいふ
ふ人といふことと云は流泉の字ハ流泉集と云ふは流泉の曲をいふ
もあつたふ流泉の字と云ふは流泉集と云ふは流泉の曲をいふ

揖詔除為庶人配流隱岐國在路賦謫行七十韻文章奇
麗興味優遠知文之華莫不吟誦凡當時文章天下每
雙草隸之工古二王之論後生習之者皆為師換七年夏
四月有詔特徵八年秋九月叙本位夢記流の如くは
こころよしの糸は海之目記ふ海を倭拖と流り又日本
紀古より百葉多ふ錦の字を用ふるは波の如くたつ
錦のやうにふれは八十波の如くの如くふ流の如
まとの海流をひくはとくくの如くふ魚とてふ
ふらり唯今ふあらしすらふらふらひ流くつらふら
とひろく末とくけていつり百葉多ふ流の如くは
訪人うすに

訪人うすに

百浪の如くはと又さうに八十波とくふらうすに
是もさうはととあり又さうに

海東と八十波の如くはと又さうに八十波とくふらうすに
これ海東と八十波の如くはと又さうに八十波とくふらうすに
ふらうすに八十波の如くはと又さうに八十波とくふらうすに
ふらうすに八十波の如くはと又さうに八十波とくふらうすに
の使ふれは海くふらうすに八十波の如くはと又さうに八十波とくふらうすに
中とそとくふらうすに八十波の如くはと又さうに八十波とくふらうすに
ふらうすに八十波の如くはと又さうに八十波とくふらうすに

惟宗元亮故事
 要略卷七十七
 中行事七十七
 一月三辰日節
 會東五節舞者
 淨御原天皇之
 所製也相傳云
 天皇御吉野宮
 日暮彈琴有興
 俄尔之間前岫
 之下雲氣忽起
 疑如高唐神女
 髻鬢忽曲而
 舞獨入天曠他
 人每見琴袖變
 五節故謂五節
 其詞曰半度綿
 度茂邕度綿
 左脩須茂可良
 多萬乎多毛度

正日んび方今のまひ姫をゆこの天女なしくまひま
 天は風ハ清くも天風と作まりとくましく吹をるりやれ
 うまひらハ名れ名りそまを天女のありのありのあり
 かり唯今まひ果て天をゆんとまを人のありま
 じまをりまれハ風まわつてりまをりまをハ風れり
 ゆるすりあまをれりまひらを吹とらまハ天とのまを
 うまひくをまり下地まをまりまをまりまを
 ねと姿と見んとまをりまをり風をまにうたあ
 りのまれハ久しく吹とのまをまをりまをまをりまを
 河いまをりまをりまをりまをりまをりまをり

迹麻以底半度
 綿左脩須茂
 案江談抄の
 説を小引

物わけをれふ見えはわぬる中ありて女志けりまをり
 六色今の字とまをり後撰集

くやくと天は乙女とあはれりまをりまをり人となれせり
 太常寺小人の若くまをりまをりまをりまをりまをり
 祢之ろんまをりまをりまをり

陽成院 第五十七世諱貞明清和天皇第一皇子母后大后高子二條
后也元慶元年正月即位八年天曆三年九月十九日崩八十歳

荒波衣のまをりまをりまをりまをりまをり
 後撰忘三流りまをりまをりまをりまをり

三二八紹運録云光孝天皇第一皇女緬子内親王母ハ女河
 班子仲野親王の女なり初敏院ハ光孝天皇ハ沖雨乃名

六條の北東洞流の東よりわたりてを編子内親王と號す。其の
まゝなり。初め此の川と云ふは、其の川と云ふ事よりあり。其
と云ひは、其の川の多きを流すに似たり。其の川と云ふ事よりあり。其
は、其の川の多きを流すに似たり。其の川と云ふ事よりあり。其
く、其の川の多きを流すに似たり。其の川と云ふ事よりあり。其
つりて河となり。其の川と云ふ事よりあり。其の川と云ふ事よりあり。其
る事あり。其の川と云ふ事よりあり。其の川と云ふ事よりあり。其
觸及其至江津。不舫舟。不避風。則不可涉。此河製す。く
おけり。通昭は、沙河の沙持傳より。其の川と云ふ事よりあり。其
る事あり。

河原左大臣

源融。嵯峨天皇弟十二子。源母正四位下大源金子貞親十
四年八月任左大臣。寛平七年八月廿五日薨。七十三歳。

河原乃流と作りて信多し。其の川と云ふ事よりあり。其の川と云ふ事よりあり。其

からけの思ゆらるる事。此の川と云ふ事よりあり。其の川と云ふ事よりあり。其
古今意なり。其の川と云ふ事よりあり。其の川と云ふ事よりあり。其
勢也。其の川と云ふ事よりあり。其の川と云ふ事よりあり。其の川と云ふ事よりあり。其
者の注也。其の川と云ふ事よりあり。其の川と云ふ事よりあり。其の川と云ふ事よりあり。其
に於て古今と云ふ事よりあり。其の川と云ふ事よりあり。其の川と云ふ事よりあり。其
の心と云ふ事よりあり。其の川と云ふ事よりあり。其の川と云ふ事よりあり。其の川と云ふ事よりあり。其
おすを志のゆすりと云ふ事よりあり。其の川と云ふ事よりあり。其の川と云ふ事よりあり。其
と云ふ事よりあり。其の川と云ふ事よりあり。其の川と云ふ事よりあり。其の川と云ふ事よりあり。其

人と志のすそをわくみそりにむきくまはり誰ゆくこと
よ初と白よりわきとまら白くはくく一だきぬよまれ
とめより我よりわくくふとつひく思ぬよまきだる
初すするありまきとめあり一初と深りとめを相
急くよりくこと古今集よまむんともかこあらん
初るとひよまらにいふんとくまきとく思ぬよま
よまこおの初を深りまきく思ひ一ん我よまれ
とよふ初より載よりまきく思ひ一だきひいぬ
わきとまひはくよ一思よまかよんとらはさんと
よふ我よまわぬよ人のまだのまぬうたんと可集集

才十口本歌云

伊豆川海立白波のまつとつさぬきぬを礼一り
志とまらこ盛まれば礼一りやみそれをりやるり
そりじやまきとつひく思ぬよまきだる

君小がーおひひまらと志とめらの奥と志けり比せり

光孝天皇

才五十八世諱時康仁明天皇弟之皇子母贈皇太后
宮藤原深子元慶八年二月受禪在位二年仁和三
年八月廿六日崩五十七歳

君うため春のよおくま菜はじむあなよよ君いありのけ
古今春と仁和のふとまきくくあつよふまら
あまひらり神守とわり仁和は光孝天皇のまきこれ

二ねくさひ合定一いさこことよまり客ふ生少れ
松とばめく貞潔一て我と信とふふらひ今や
ゆりまてわらじすりとそのかひひらつとをかくさじ
百十二
あまのりハツるは川のわたるいとすけり我は意つやわらん
百十三
いとよる乙女はゆふあそびとくく一いひハ今ゆりせん
拾遺
あつたよふまて生つる昔は葉乃秋風ゆらし今ゆりあそ
いそ仁和の沖智とゆりいそ葉と和葉本の縁あり又
仁和の沙時老信とてはつとまらりあれ

在原業平朝臣

阿保親王弟五男母伊登内親王後四位上右近衛権
中將兼美濃守元慶四年五月十八日卒五十六歳
三代実録云業平體閑業放縱不拘畧益才学善和歌云

業平とゆ年の同母身とすハ湯く別勝之三代実録云業
平者故四品阿保親王娶桓武天皇女伊登内親王生業平二
れゆ年同母身といふす一七伊登内親王と娶て業平とらじ
とて記ていふるハ伊登内親王はうと久ハ業平ハ湯ク澄
なりされとて伊智物治よとひとりのまよとありたれはと
かよとて一仲平ゆ年号の母されといふのを志しハ伊登内
親王と伊登内親王といふるハおほし湯なり用命す
續日本紀ハ伊都内親王とてあり

千石破神也とさうす立田はくく多きを并よあそくるとり
古今秋下二条の名乃あふれとやいふとヤリり時と河原

風立田川小知集なることくわくわくかめむらぐを願く
よりのとて素性法師

おまののちいへ海なるふとふおぬらなるやあはしむ
いふれ此より仔細物清まらじりやとこみこらせうえう
しきふ雨よまうて立田川のかたりとてまらうとありこれか
作り物成されはなりと古今を真福とすしららぬゆかり
神といふ厚き枕詞の日本紀に教忌をいらとやとまらぬ
たりきこされと神は昔神も貴罰ありあまませはらと
やゆるといふ一語をとと喚しとららぬやうといひつりい中れ
ふりし昔は濁りといへる流は古事記にも百葉集にもまの字と

かり又百葉集千弼破とて千磐破とてくわくわくけとこれ
又濁り流たり何う何う何と何ひきとつ詞とらふ
かより又日本紀に殘賊強暴横悪之神とく記くららぬ
わききうとてまは魚神のたりき一語に付ていつり
此神のころは日本紀に百葉集にららぬとていつり
るゆゑ先達ららぬゆかりといひくは神とつくとこの知わら
は流くつりかうぬ流さるはを擲りくなくし一かれ
まといといを教なりじまわらいうくり釈せうんら
らぬゆかり神とばきこらとてはあや枕詞なりといひての
とらるん百葉集に人の丸の向よりららぬゆかりとたこむと

よめりことさハ秋せりゆをゆー又千早人字法とちりも
字法とてけりあふりこれ又神とつけハ秋せりあわ
ゆる次立田川と紅葉れまらゆるゆりひと
ハ神とせりせりあふりこれ神の中よりあふりけり
あふり奇美のふとあふり神のせりあふりあふり
ハ神のせりあふり此奇美あふりあふりあふり
いそぐ立田川とゆりんとて神せりあふりあふり
韓知といふゆり人のせとなりて神功皇后之韓とあふり
あふりあふりあふりあふり神せりあふりあふり
あふりあふりあふりあふりあふりあふりあふり
あふりあふりあふりあふりあふりあふりあふり

なまー川とハ錦のゆりあふりあふりあふりあふり
とあふりあふりあふりあふりあふりあふりあふり
亦譙周益州志成郡織錦成濯於江水其文明勝於他
水濯之不如江水也といひりあふり
あふりあふりあふりあふりあふりあふりあふり
是又本文のゆりあふりあふりあふりあふりあふり
ゆりあふりあふりあふりあふりあふりあふりあふり
あふりあふりあふりあふりあふりあふりあふり
神せりあふりあふりあふりあふりあふりあふり
これゆりあふりあふりあふりあふりあふりあふり

流の沖幸と在東友干奇小

震ふよハ立田此川も流よりり度されるわよ本業くらハ
只一りり有り友干ハははははの男なり業年逝去乃極
伯父の言よりすり流の中無念るりりりり定家

みり地流はは田此春風と神せさうぬ花うらさきり
右二首見方よとちありと貴中りりり一雨ふひき又すふ
と亦ふ名所とよありと一類とすりんを

友東敏行朝臣 梅察使富士齋房 後撰集卷八の他者
從五位上大内記

伯の印れきよき浪よりさくや友此母流人りきりむ

古今無二寛平の世時よといれまの言合りことあり

寛平宇多天皇の年号なり初の二句よりさくややりよ
るき序あり友れきりし流といひひの友ふきり
方一とくともるをいふ夢の中ハハハを友ありと志
さり友にれりつれとく人りをさくるとさくりり
しれとをともれん莊子言其夢也不知其夢と云り
ありりよ遊遊と云るさくやといなりとさくりよハハ
人りを流びことのあるる

百十二
古今小町
たふわははははとりり友ふふふふふふふふふふ
うげよハハハとてわめ友よえん人りりりりりりりりり

この字小流りりハ業年の姉よかよりり一回時の人なり

と三田川に流の江も觀せりぬるべし

伊勢 拾芥抄云伊勢守藤原继蔭女

三代實録卷四十九仁和二年小後五位上藤原继蔭伊勢守とたりし時をりて名つあしりぬ

跡波の聲さわりのゆへにまのつとけ世をさしてよとわ
新古今意一歌志の家集に歌なり種波のちやうと
いふる茅ハヤののをいひは世をいふじあ先之ゆのの
之はすなむらみしとさふあきとさかきくうにわら
とちりりハをうしうさう中れうにたをいふんとくあり
人丸のやま友抄のくすのほけにこのまこととまき

ふりふおれ一又百葉の歌の長あまなしく玉藻のゆ
れまことありすうしうりれ對面ハ尾をうとまゆといと
一よいとひて志うはりのわあやとあていせとさうと
てよとの心をとねうふう新古今はのくあがうと
こまはうわとるふひて花山流浄製

はのそまなうゆへにわぬる経を魚はふとまら
今の伊勢守をとせまひめりよや

元良親王 陽成院第一皇子母日服院遠長女
三品兵部口天慶六年七月廿六日薨

わひわいハハとておれ種波のちやうとまらとさふ
後撰意五いてくはよ京師のちやうとまらとさふ

ソふんくさうりだのり重てまへハ及てあぬと我ハ偽
ともあつて七九番を介やくとゆゆまのめれ月若
おまぬとしひくこぬ人の名言を歌いせりさりのめハ
十六日より後といふかやうおゆふとそふりハサロより
ハ後の事更とあら月く人九前よ

長月れあめ月ろるはつと君一とまきハさうあつても
いふをさうを九部はよ長月の事れまよにわりあゆ月
あつても人をゆとさうり密部云今あむとしひ一人
月比まるとさうり秋とれ月えあめさうりわつとそ
ゆりらんさうしひさうりハれふつ一なまもやとのまこと仲

又う奇ふ

有め月れまをまろをふまよれいこゆあふあつて
ともあつてふ一帯れつとよしと感情ハわくまてあつて
古今れあまをさうりふいふろおはハあゆあめの人久ゆあ
ゆあまあるとさうりつふ一き前ハあつて信正海照つと
若ハあつてあまてあつてさうりとしあ前あふ今えんとし
てさうり朝よりとしふ奇より十餘そわりそふつとね
よこ一帯れゆらるとあつて一は探集

今こむとしひさうりを命とゆゆりあつてさうりあめのと

續拾遺集

いらひ小堀ぬを友集れ日ふわりてさげふあそり
 能れと彼志も助語なれとび志とるきとひひとくたり
 但本竹さとのさくさくさくさくさくさくさくさくさく
 さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
 日不絶ふは流い云字ぬ郡利とほりて字倍字ぬり
 耳おさぬれさるのりりのさくさくさくさくさくさく
 山風れ吹さるのりりのさくさくさくさくさくさく
 らしとぬさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
 竹より友則さくさくさくさくさくさくさくさくさく
 梅れ字をさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

年のうちれさくさくさくさくさくさくさくさくさく
 とくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
 詩とさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
 ひさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
 也和名阿良之世孫撫はふさくさくさくさくさく
 心わり百葉さくさくさくさくさくさくさくさく
 おるり又荒風さくさくさくさくさくさくさくさく
 とは先秋さくさくさくさくさくさくさくさくさく
 今さくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
 く康考りゆさくさくさくさくさくさくさくさく

かゝるにこれに付て不審あり古今に康あり

去れ日の名をわたり我をれとかりの香とありとこひに
とありの二條此後の東まれをを雨とておりしきりり
時おまるとありの芥人貞親十年のたいつとれ年とりふ
ゆをちりて以後元慶八年仁和三年とこくは是貞親を
言合に實業よぬく又いつきのものふりゆりんくこれ作者
とるれに敏行友則忠孝千里朝康漢人を知るにあり深業
のこもれゆふ志のあまりにくくこしは言合の比まこく
うく七十作あるくきれに盛年の作者ふゆりりて
漢一とくそく次細れと六帖に今むゆりの言と相康と

すりふひうまこくこれに朝康り言とや古今に名書あや
まゆりり但し此にも今の言と康あり言とを後人り
しめおありし重なりんこは但し此下とふこれとさため
て有りふひりりありありとありはおゆつりり一紙乃
言ゆりりとして長月のるめれ月とりりしはけりりを
大印千里 音人之男

正五位下作者郡類拾芥抄等之説

大己貴命の沖子天穗日命十世孫と野見宿禰といふ垂
仁天皇の弟世と功ありく光仁天皇天應元年土師宿禰
古人号宿地といふく菅原姓を賜はんを清く許さる
延暦五年正六位と土師宿禰諸士名と姓と大枝朝臣と

賜ふ外従五位下藤原家孫乃長秋藤原家孫女人等とて
姓と朝臣と賜ふは之氏とハ皆古作とてひらく之古氏
小正之くは腹わり桓武天皇乃外祖母モ受腹るりこれ
ハ大枝と賜ひ之外ハ菅原秋篠等と賜り大枝音
人ハは表となりて大印と改らる者人ハ河保親王子
なりり大印氏子なりして昔もせりしりり未考
古抄ハ平城天皇河保親王等とつねりハ知るるは
月又まはるる也こそりゆれ我れひらくの秋はわねと
古今秋と名負のミコ乃家此守合の命とわり子里ハ信家
トて文集中秀白と題とくくも満ちたり守にり

されははるる白氏文集の燕子樓中霜月秋秋来唯為
一人長と作り詩を詠筆して満ちたりり月を詠
ひは法就よひりきくかもく小也こそ也り
アとてひとくに世との秋なりてあ身ひらこのありふは
秋といわねとありたりれりりこの我れひら
わらきまらるるにむゆりりりり人羨家此華靡心
漁見漁見皆憔悴此秋獨作我身秋と他らとまらりハ
燕子樓の為此也

我ありふは秋なりりわらるる心出はるる心を出り
新古今集巻の

海じとみみ小ねがし月小も我身ひつる事此松を
幾秋とみみふくもとさわんつる方きつる月よりきく
七二首秋のすむるを一類とい

菅家 諱道真字三叅議従三位清公孫叅議従三位是善子母伴氏右大臣
右大将正二位正曆四年贈正一位太政大臣

ふれしひもあさとりわひも向ふみちれば後神れまふく
古今羈旅朱萑あつよおりまきり時を向ふにく澄侍
アツク菅束朝臣とわり是ハ字多法皇朱萑流し侍し
けり時をく小み白きわたりそ徳身よてまきり奇人
朱萑流し拾芥抄小足よりも向ふハ大和より山城より小
小細り雨の奈らふ心り味としふ百葉集より長屋王駐馬亭

樂山作奇小

御帰さてもうれも向ふ重あさハ妹とめしを相なりや
忘れ祿のそく此心と誠りて神ふ時とて海よりおりや
古今集一躬恒

乃ちくハ尋しゆくんお葉とわさとも向く秋よりり
いも向ふ東人守り色よりあといハ信流く凡心との不
とつる雨をいほくまともあうけといふちも向なりて
神小もあつて平安をわくくあつて誠りなれななりけ
度ハ度の字ハ旅れんとてよりハ終ハ是約とわき
くまのしひととよりり板掛におそこの旅よりまき

今あるまはればはふらりとつひくゆりゆりひきつゝ女
系枕いしひへけり年月はたかひくうきつゝさむじ
こまあゆをぬり寝たり帯とぬわいといふくうてむを切
とも向ふとけり方とのあまのえく一むを切ふくハ帯を
減のゆきとておし一時帯をぬりくすおしをれハ帯を
つげとけりとつひく私の施物よふをきく一ぬく志うり
にも向ふおまふふさいふくハ乃ゆきうりされこね成
まのよそふはれくゆされハ神のおりうきんまは
まにうあまといふも向ふとけり方ふあハぬわくまお
系と帯ふも向ふるとぬきとつひくやちあ系ふあても向

ふれあふしひかりくこまのハかりをゆき一またにくちあ
あふ清言とて候言てし中まにふとつひまといふち
あまにくく略語なり新物撰集家陸
も向ふあ系はあにぬさいわれと程月教乃けくお白系ふ
まは秋の清ああをりてさだの二首うけけりて先
三條右大臣 定方公内大臣高藤
二男右大臣左大将 公卿補任云延長二年正月任右大
臣云
名しおりのあふ坂ふれさひかきくハあまてくろくしとふ
塩探意に女れくふはくうりけりともさとのあまハ相坂ふれさひ
かつハ葛うつと名ふおろくやああてんぬてさぬ

拾遺雜秋亭子澆大井川之沖幸ありて沖幸とありぬ
原が雨ありとおひせまふふのこし奉りんとまうして
とわり沖幸の幸もふみ白蛇をせとし沖幸といはれ
中沖幸とはちふふしおひの中古より此さるる
一亭子此こしと大井川沖幸ハ昌泰二年九月十一日なり
沖幸とありぬき西とさわりぬ山川の終いさゆひ
りさ中よれとなく小倉山のぬきよりその終あり
そのゆき増まり只今乃おひせとてうめは海より
海よりわくはそのこし奉りぬすしはわりぬ
さしりて沖幸のこし奉りぬすしはわりぬす

してまらせれといふぬ大和物澆ハ亭子此帝のゆけ
おひさたけ大井川はけり海つりまらぬ小倉山
よいとありありけり浪なくりてまらぬ沖幸とありぬ
小いと真わりぬきわりけり必奉りてせし安んを
まらぬよ小倉山のりらとわりのこしひはれぬ
まらぬとたんとりりて海りまらぬ奉りぬす
真わりぬきとて大井の沖幸といふゆりぬす
大澆おもわり大澆ハ沖幸ハ延長四年八月とありて青二の白
お糸の冬とわり百葉青丸ハ白を立田のこしゆす
お糸の冬ハ澆のこしは花ハ咲りぬ教るふりありぬ

嗚呼ふぬーーとくれば花のさうりに足ねとまて居うう世
さち今やーとふー又云鳴山ともしきととりの川をひの
とらーのふよまきのふと我之うーのひとよのーと祿
いふーうに尾の上は橋のむい流は流し落てさうれぬ
居うーじま目まてよいふおうー此風を吹うと打うーく名よ
おーいぬよ風系せういお首おもふ花とお葉をさうり
いれとふいふーう雨あり又ふ帳をさての守忠房

昔時山花れお葉をふあういまねの清幸はさくくまめ
忠房の大和あるりきりけしけし幸をそと清幸をそととて
ーわりてよりのま今此介ふとくいさうりありたの首

菱あしそのうーと大信とて浦ーくうれい大信れうーり
おのくふとーい葉本とーいありと一類とす

中納言兼輔

右中將利基子中納言
後三位承平二年薨

みうれ京とておうーいけい川いばさきとてうーいけい
新古今恋一歌ふいお葉をいなし一人丸のおー初おこふ
こふ京いけい何と漢まひーとむまうり二番若京泉河
すふ山城ふ相樂助よわりとだくさうーいけいことこふん
あうりみうの京より波川のうだくあかーとあわす
かくていけい川いけいことつらんさうとてさうさう序
あり大言いさふぬ人よ恋の切ありんその人といつる

とてうくいふりつととらうらわしびしし泉川の由緒
日本紀云宗神天皇十年秋九月官軍進到輪韓河垣
安彦挾河屯之各相挑馬故時人改号其河挑河今謂泉
川訛也百葉の字は楯並て伊豆美比河といふりそるり
は言しゆる名而わつとをりくとも次なり

源宗于朝臣 光孝天皇孫一品式部は是忠親王子
右京大夫正四位下天曆三年六月十日卒

山里ハ冬とさしりハ海よりきりくしとあしりまぬとて之ハ
古今冬動ハ冬れ言とくハありとて山里ハ冬とさしりハ
はとさしりハ記せられと長秋ハ花の葉のゆかりふとの
つらまれの入りとるり成冬ふしてさハそのまき此ハ

おとといとあふととくハに記さしひくありハさあふ海に
けりとよりのたりあもといふらわらあしり葉のハ海と
葉あしりりハ古今ハ世の中をいふ山ハあふとと
あかうのむとのとありなとくハ知ハる家ハあしり
いつとてさしりハ山里ハ葉の系とてさハありすり
是今ハあをねてさしりハさしりハさしりハさしりハ
さしりハあしりハさしりハさしりハさしりハさしりハ
とくハあしりハさしりハさしりハさしりハさしりハ
さしりハあしりハさしりハさしりハさしりハさしりハ
よまはらふいあしりハさしりハさしりハさしりハ

そをりていといとくともつらんと人せと書くとハハと

ふゆーとゆふりくくくとすれをといと一説と申す

凡河内躬恒 先祖未詳經甲斐小目
沖厨子河内流路縁等

古今集此序より甲斐流路縁等より凡河内躬恒とあり

能名よいあの類わりたてハ冠をかりゆり布衣をかうい

ふとかくおとく又さらくまんをく流之凡河内乃姓ハ神

代紀云天津彦根命 是凡河内連山
代並多祖之 古事記云天津日

子根命 凡河内國造
号之祖也 若い氏の人の河内者のふとく

て代を強く河内を治めきりといふより又日本紀ふた

河内とあり今ハ河内といふ氏母よりおのころと

いと躬恒の氏もさこそつらふとていふて書よりお

うらとハソひありりやこの凡の能名乃例和名集

小丹後國加佐郡凡海 於布之
安萬 ちまふるそくく能

名とかく應たるり

ふあていといとくともつらんと人せと書くとハハと

古今秋下白草此花とありふあてといとくともつら

ひり重なりゆと書よ入て晴はよあわらよとこのがく

不えく尋ねりつたといとくともつらんと人せと書

とくともつらんと人せと書よ入て晴はよあわらよと

今中不重なりといとくともつらんと人せと書よ入

て晴はよあわらよとこのがく不えく尋ねりつた

三つりりめりなりとわや

三代実録第五十云仁和三年正月七日授左近将監兼
播磨権少掾壬生兼成外従五位下正勳成りまるとや
忠岑和哥十餘を撰とらふ先師土別刺史叙古今哥
以自帰といつり古別此刺史とハ貫之るりまは貫之と
昨とせられありまや

わり明ははまなく及る一別より曉くうりまきものいり
古今高と記あしはり古抄ハ逢無実意とわり取昭注
云あれハ女のもやまらかへるふまきハめぬとてあふふあめ
の月ハめりてあてはまなく及る一なりを計り

曉くくお河内とまきり多々あまこりまき一なり曉くく
ふなり実家は海劫云つとれく及る一はらふとゆ
めじふとこのはまきハ及るまをえんふたしくまきゆり
うまこれやとれあひまはまかきまじ世の思ひあひ
ゆりまきとわらうらハ取昭の流絶く一と実意もあひ
まり志りまきと枝葉瑤林ハ不逢海意とわり同く考
らふ古今集よびああらす一くめりなりとれ中一
らまきまきゆりハ帖まきまきとわらふとふ歌のあ
かせりされはまきひなくあま海意と及る一つまき
まき一これハ取昭のまきと月此のめりまきわらふ

それよわいまうしてつとをまほきとおもく意ハ
さほくうたのむのむさやふあともくくゆり暖か
うたのむさうとこひまりねともりかふるくこれ
他者のなとととよろうよばあ

坂上是則

田村九四代孫好蔭男
大内記従五位下後撰集撰者坂上望城父

物ほあまの月と名はまてふし
古今多動や下との山はゆりきり
とてあまるとありあはゆり
ひとけこまことあまあせり
ほふかくハ淡かすり
来のめを

月ハ光とおさめより朝やあふ
のりふあまの里よ
めれ新またとふ
古今集小宮の奇十七首
あ

まぬく
とふ
撰

来りハ月と見え
我宿の庭
庭ハあつふく一面

吉野の里に音はばりりはりぬるわははるのれはるのれ月が
りささぬるわふゆふより後探集一源道濟
朝初もあぢゆり里とえ渡せは山のこふふ月そのわら
又お家ゆとををぬこ

さしてふとれとゆふ山の葉はるの月ふゆりあぢ
はふと今の守仙り若はるのれ月はいふと知る一志
常一守とゆふ我らまじりハ昔はるの月といふるあぢ
るる

春道列樹

従五位下雅楽頭新名宿祢一男
文章博士正六位上壹岐守出雲守

山河上風のりけりあぢるるはるるわぬりくらりけり

古今秋下志賀はふとじてまじりとあり堀川百首二百首
ふ合ふも志賀の山越とつふ影をわらり影照云志賀は
ふととハお白ゆり流のるるまじりよりてあぢるる
登りあぢるるじり一志賀ちゆゆつとくまぢのん人れ
性東志あぢるる一雨と志賀のことハおあぢるるはるる
んとと井てひとふゆをあつめて横さゆり竹葉るとは
かしてはくろゆん今さら山はれあぢるるハ人のゆりくわけ
りるハわらひをまわぬまじりかりりみらるる
風れあぢるるあぢるるといふん川のゆりらるる
あぢるるして流るるせうれりり石れあぢるるあぢるる

とらりくは續後撰集の洞院抄政成入信

大井の切せの志しきりぬ葉の茂ゆやぬまて

紀友則 一説宮内省少輔の友子
大内記又一説有孝子

紀氏を祖ハ武内大臣子紀角宿禰

久しき光のとききまはれふ志つふなく花のちりん

古今春下栂の花れらるるを忍てまありとありふ帖より

二句光さやらばとわや久思ハ百葉久方とまあり天と

そとまふ一き栂詞あり天光感而地法定といふとあり

されははらふ對して久し記方とふの又天を陽やい

健剛されい久しく望しとふふ久又續日本紀の甄葛

とふれよりふまふよりてふやと武成武誌大衆祝詞の伴

辨冊書大の辨生ふまいさくはるやうまて美泉の趣き

まよと中途と大の神れあきん付誌しつやうとこ

かといふんとおほくして立ふと神の物とていふ

ひとり甄ん神代考上天吉葛と書てあまれまつとい

へうゆをさうく一ふまはたをこれとくとるや甄る葛

れまらやうかれはさうやいつさかわれちよはくやう

されもたよと天象の物ハ栂栂詞を用うなりひりりのと

あはたとハ日れわやふまらるるをソひまはれふとハなう

まふるりのとていふと長くわらわを何まふるりのと

いそぐしー 此心なき折しー 花さるりわばさー ちりちり
こころそつみん 水音を時とてさくりのちれとさくしん
長らくさふいと記てらるるわさー 之後携ふ涼甚又
かなも

おきてまはさばりののち記とむれらや何りそくらん
これおかしん

孫系真風

奏議瀆成曾孫正六位相摸椽常成子
正六位上治部少輔或記下鑑権守

多きとすとあらんよせじらゆれ松とむしーのち好くさくよ
古今新と類あしひこばすハ真風老果て著れ友のひと
アも海くさくをさひひよりらるり注とよとつふん人の

よふがさしーいおれとよと何さうなふせんとよふらるりあゆ
れ中よハさゆゆの松ゆさくさくす西とゆさくさくさくさくさく
さゆなれとせめくかれととさくさくさくさくさくさくさく
孫ハ外よ又注うわんとさくさくさくさくさくさくさくさく
よりとさくさと松さく我さくさくさくさくさくさくさくさく
いふらん貫之の音ふ

今まそら男とハ知ゆり位のいり松よりさ記よ我ハ今まなり
いふおれー古今ふば真風此音のまよ

わくーつせとやさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
影ゆよこれハさるり海のさくさくさくさくさくさくさくさく

こころり貫之家集といふ海さうふらん人の家ありと
とつひつてありーくほどは傍白ゆりさとのとろも
たりハ神代紀下云其雄飛降止於天稚彦門前ケテル植植植植云多
氏湯津枉木之抄は植の字なり人ハいさふもあつはとい人
ハふもいさふといつふとを詞をゆーくころんそこ是
おとてよこそかりおとなーこはうけまれ人の心ハこれ下
も変り物なりふゆーてや年比わりくわらふといふ
くおかつぬーわわわ次は宿の樹くと若らう
に白ひゆりふとてこれとをけしーとつひくあひまひり
とあつらふといつ時のわらうてせわり

花ふといーくさく物と魚らん人の心とを
家の真一裁りて作見記よりさきの流とわらう
云ひてせうつら宿の樹れを若らう若もれ白ひり
は下白今の言とふおるー又なるー日記の詞ハ山崎れ小
櫃の法とまりりれゆーのつとりりりさりりりり人ハ心
ととあつぬととつふるるとつゆりハ今若と白れりり
さりりりといふまては下白れりり同ー貫之れ秀すいりり
わら魚き中には是ハ苗屋さうの言れりてつれをおさる下
は女れすといおほく苗屋の秀すをおさるともつらとよふ
にけされいやとい秀すはよまれぬなるりりり列樹あり

いささか青きうらハ詞おるくてもかまじり為家ハ今此言を
とりて

外社の垣のハヤのハシくいでめわら月乃おけやとらん

文屋胡康 先祖不見一説
康秀男

白露上風の吹く秋此地ハシぬきとらぬおとらり斗は
後撰秋中ハ延喜此沙時守名ハきれすとらこわし付く
所書わり菅家百葉集とハ秋前亦六首有申此首二そ
は方わり寛平五年ハ撰ハせりひく后宮守合是貞親王
家此守合のちとを載し古今秋とハ同ハ人是貞の
この家此守合ハあり

秋の聲ふむく白雲ハむかひもけりぬきうらを此糸糸
これ又菅家百葉下にわり同様の守とらぬハ秋の聲
の音をるふ小風ハゆぬやとハ糸を糸とて玉とつたわぶ
いととらに風ハわりと海をくらすうらとらハいと
おやさとらりととらぬハ後撰の守に

糸糸糸糸糸糸の細きとらハ楽天の詩ハ單縷草雨剪齊と
ゆりゆらと二首月と露と渾わり又たりうらとらと
一類とす

右近 右近少将季綱女
仍号右近

日中より方をと思へどもちひして人の命れおしむるわらふ
捨遣恋四類不念大和物語よいとこのまをいしとこも
はのめをうけくらひひれと忘まはるる後よひやりり
とわり男ふますく女の方をと思へども物をかりたれと
それをも程忠とぬいそれよりゆく歎くこころのわれと
なりいふとされハ我とまをいしとあれ神へけて誓ひ
男れそのちひしてとびだて忘れはまは法祚のあくこを
てよの命れ絶えを惜びぬくはくも君とまをいしと
しく貞女の心るり後撰小人の心りいふまはれをいしと
思ひいとぬれりハいとまをいしとまをいしと

これとおれ男ふまらふや又後撰一信明

いひさすいしとまをいしと我れをすてく君をうけ
い下向そのまはゆり定家公今れすとりて

あきより好忠り守まて九首ハ恋とまをいしとく一類と
す

参議等

大細言源弘孫中納言希子参議正四位下
右大弁天慶五年三月十日薨七十二歳

あさらぬれよの藤原志のゆきとわゆりてかゝる人の恋

後撰恋一一人おはるるまをいしとわり古今集

あさらぬれよの藤原志のゆきとわゆりてかゝる人の恋

ゆかりの人の垣と紙を穿つんとお印のる屋ぐい
百系才十八

相心くわわらん思とわわしくするらさういかり人のとふまを

壬生志見 志岑男見志見家集河厨子也
頼天徳二年任攝津大目

志中てふ我名ハキハシたきより人志まひ了七ぢひそり
拾遺志の一考即上入上の意整前よりふうこくまはたは
日本紀上嫁れ字とより印一字とわわしくめとせうのてと
とより若り皆ふよりわりすれんはさう意とらとつ名のおしひ
とくけとらわくよりいさめらふ若らとといふあまく名ハハ立
けん人志れぬぢひよとていあや一のとといふらん

はたたよきに秀すよと判者小若ふ殿後願と定く〇く天
氣とうくひひ冷もきふみと激若ふ意整う前とみうを
さ後うひくれハ天字たよわやとと意整後よりり波字
合判の初よそより少石集ハハじ字合よまけく志見お
ととより不食れ痛つさく死よりととがおりふれととと
ほとより一ありとと家集よとと思れハおつとと
人志まを志のふり浦よやくはれらる名ハキハシた立糖と
右二首ハ九それ中ふ思ふ志とよりを二類といふその
中ハ返二首ハ回けの字とりて一歌とす

清原元輔 深養父孫下総守泰之男肥後守
從五位上天祿二年六月卒八十三

賢聖さるる事神を志けりつゝ末に松山波にさしとら
後拾遺意同ふりりてゆりきり人ふりりてあるとあり
古今集法奥奇一

君とてわすしを我りい末に松山波もくめん
是を本前よきていあり先本奇の命は君とて記さるる事
ふか来しうい末の松山波にさしとらふかふと波のい
ゆり世終るわのゆりたれいあふかのがらり無わし一や
ふかといふ人これより人のふれうらうをまらふと波に
ゆりといは漢るいせり整りさるは整りくさるかと結句
よりういさくさつら整と法定しと人よりういさくさる

ひりるりあしし神を志けりつゝ末に松山波にさしとら
下ふ波をいんあめの縁諸るり我は文に今しかけりん
か一人といひふかをうらうと整りしよまふとの
といふしけりこととるり法定しと人よりういさくさる
海ていゆし

権中納言敦忠

本流左大臣時平公三男母筑前守在京棟梁女初為
大納言圓經妻将懐妊後嫁時平公生敦忠仍実圓
經子也天慶五年三月叙位任権中納言同六年三
月薨三十八

わい見くの娘れふふくゆれいびりいあを思はさりる
拾遺意二歌志しは若とハわいぬさたをりあひまぬ
さたハわいれつ度おんハうらう整しと人よりういさくさる

とこそおのひつぎと相見てほいさくは清くけりさ
ほさりいと我れと似せま一人いふさうん
のうりやせ海一せれんちいふいんを
すくられいとほをたれそそのさだめり
あすといふんそ六帖のいほのふとせまはあ
いさかきまのふまをさちとしほのふと
波はらをゆく朝一く用ひしりや首ちとい
朝のうらゝいふ屋し次

四十一
わいてい志りと志はるせんも志はいと
志まよりり
志と志をくさむと人いといえ後ととも
志海よりり

右今
ふとゆりれ中めなりくふんをい志と
わいてすい志と志はるせんも志はいと
志まよりり
志と志をくさむと人いといえ後ととも
志海よりり

中納言朝忠 三條右大臣二男經三位中納言
康保三年十二月薨五十七

わあゆれ絶てしうくハ中くふんとも
拾遺一 天原の沙洲守合よとわりひと
ほ又志ゆれはゆりせぬより人と
ぬさらの恨はゆりせぬより人と
はまさりりあふ中くふんとも
かろ款ハせしゆとといふん業平相伝る

世の中は地獄極楽なりせしむのふちのふちか
いす極といふはあはれいふはまきせしめてくら
なりくはありきふ仰へん右二首官位のかと人の
かと思ふのゆかりを一類とす

謙徳公

一條攝政伊尹公九条右大臣師輔公一男
天禄三年十一月一日薨三十九諡曰謙徳公

あはれといふ極まらんハあはれいふはまきせしむる
拾遺鳥の物いひりり女の娘はまきせしむるはまき
ゆりなれといふゆりすれは初初んころにおさしひさ
はつきたるるりて相及りたるとるは我ハ忘死ぬ極ま
かたれともわかれといふいふらん人おぼくせして後

く死ぬたるといふらん死はまきせしむる極ま
はまきせしむるはまきせしむるはまきせしむる
これじ極まるといふはまきせしむるはまきせしむる
してよりの感情はまきせしむるはまきせしむる

わいふせしむるはまきせしむるはまきせしむる
とうたうそふしはまきせしむるはまきせしむる
かくての我はまきせしむるはまきせしむる
えま集

忘りて君のいふはまきせしむるはまきせしむる
うまきせしむるはまきせしむるはまきせしむる

ありに抄は、いとやうに注せり

曾根好忠 先祖未詳

丹後橋 号曾丹

中良れとをこころに人権をぬき、世もあつぬ急のたふ
新古今無一歌あつぬ家集よとわりのけすれと句とく
く比るり習志見とハ新なるそく女とそゆまになせらふ
楳ハ妹ふよ世迫門のしーとた和とはいひまらり
れ秘伝なるふとく一りしーとた和門も楳とよま
けれハ一歌とたうとく楳の言便よ志とよひと進
れふもわふ習と今ハしひまらしれ秘伝なるふとひて中
とられ見捨られハ楳を失一り和のこく我意流とひく

我意の流
あつしとく
なまふ
流とよま
うと

束定び屋記かゝる一とくは中良れ門と紀伊人とくふ
沈わりとの由良わらりり勿論なれと曾丹集と見
りふ丹後橋ととらりれ居らりりと悲懐してとらり前
おゆれとい由良も丹後れ中良なる一又紀のよれ中良
ハ美集と世の流中らりりとたたるととゆらり
よ名りやるたれとい中良も丹後なるりりゆも一樂天
大の踏し男女の中をもて君信れ習よとく一とらり
は言も表ハ意として我一たわらりり吹奏してみよと奏
もらり人あつてらりりれと然り一三官齋を授らりり
たしと多とくいせりりや男と和ふと世女とゆらり

ふりやハ百葉身成りて先てそを散らしては六首を
十のよわくし

百 大おれがらのの海よりよりいふ人のゆきはさん

日 湊入の道は小舟よりおが言我ふ人よわにぬれり

日 白浪のわたりを言はれぬ風をゆりの志をかりり

日 いくもまを人かたりりそ大舟はゆのたせりゆ思ふ

日 堀いさくあやう小舟をかりりゆ人も意をかりり

日 舟のふんおをまをいさく舟の波れもはまよりり

日 大ニ首ふれりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

惠慶法師 先祖石見
寛和之此人也

兼盛時文重之らくと交まほくあり

八重じつと志けきり若のさひりゆり人こそまへ秋はあより

拾送秋河東流をわれり宿は秋あるといふをく

しゆりりりふとあり貴之りすふ

とふもるた若ははとくまへ八重障もさつりりり

これととわりまうゆいふり河東流ハじり源融ふ

るりみらぬ玉垣の浦とくはさきり雨を初より

ひなき家雨をかりしと今荒廢く人知もて

雨よけきの雨とまうはきりて秋のくを感しては

ん後拾送秋上河東流とくすゆり

ふまゝといふは、ついでとつゝあつり百葉身すてふあゝ
といふ言諾とつりてうあつりも清濁とつよひせりかゆ今と
おる一むかひのすすいひとあつりまゝやい白何り
はくじまをけいけいもまゝに印一取照云はつあつり
こまひのさうひさつりいあつりい下照云はつあつり
能同押元議おん考六帖云

つゝいふは、ついでとつゝあつり百葉身すてふあゝ
といふ言諾とつりてうあつりも清濁とつよひせりかゆ今と
おる一むかひのすすいひとあつりまゝやい白何り
はくじまをけいけいもまゝに印一取照云はつあつり
こまひのさうひさつりいあつりい下照云はつあつり
能同押元議おん考六帖云

下冊やあつりはの系だゝもあつりつゝいふは、ついでとつゝあつり百葉身すてふあゝ
といふ言諾とつりてうあつりも清濁とつよひせりかゆ今と
おる一むかひのすすいひとあつりまゝやい白何り
はくじまをけいけいもまゝに印一取照云はつあつり
こまひのさうひさつりいあつりい下照云はつあつり
能同押元議おん考六帖云

今葉は実方言すは六帖のつゝいふは、ついでとつゝあつり百葉身すてふあゝ
といふ言諾とつりてうあつりも清濁とつよひせりかゆ今と
おる一むかひのすすいひとあつりまゝやい白何り
はくじまをけいけいもまゝに印一取照云はつあつり
こまひのさうひさつりいあつりい下照云はつあつり
能同押元議おん考六帖云

